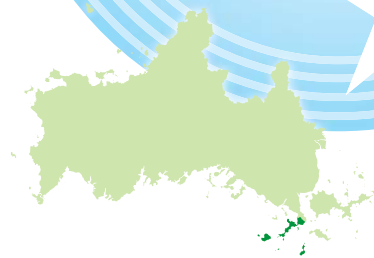


わがまち自慢

町長室から



かみのせきちよう
山口県上関町
かしわばら しげみ
柏原 重海 町長



「海の町・上関」の豊かな海の幸

上関町には、嬉しいことに海があります。これは私たちの財産です。町内の『上盛山展望台』からは、瀬戸内海の素晴らしい眺望が、本州はもちろん、四国、九州まで360度見渡すことができます。

『防長三閩』と言われる、かつて海上交通が主要な交通手段だった時代には、村上水軍のお城が築かれたり、朝鮮通信使の寄港地になるなど、ずいぶん栄えていました。町内の細い路地には、当時の街並みの雰囲気が感じられます。現在残っている史跡は少なくなっていますが、この辺りは全部白壁の町でした。

また、祝島の『神舞』は、1,100年余りの歴史を持っており、山口県と大分県の2県にまたがる大きな海の祭りとして、県の指定無形民俗文化財となっています。そうした海の町・上関ですが、昔は農業中心の町でした。戦後、時代と共に交通機関が発達し、広島など大きな市場に出荷できるようになり、漁業も基幹産業となってきました。

上関町の周辺は、豊後水道から大きな潮が入る魚の宝庫です。ですから、魚はおいしい。山口県では、河豚のことを幸せの「フク」といいます。昔は沿岸でよく獲れました。町内の老舗旅館に「フク」を目当てに、中には結構遠くから飛行機やクルーザーで、お客さんがいらつしやいます。

ふるさと納税のお礼にお渡ししている「車エビ」もおいしいと評判です。車エビをお礼にしている地域が少なく、希少価値があるとただ、これからの沿岸漁業は大変厳しくなると思っています。我々や特に先輩の時代は、メバルなどの瀬戸内のおいしい魚の需要が高かったものです。

ところが今、魚離れが進み、後継者不足も深刻で漁業を取り巻く環境は決して明るくありません。ですから私は、「朝日を浴びて出漁する漁師魂だけは忘れてはいけないが、これからの漁業は定置網なども手掛けて、蓄養等による出荷調整や加工に取り組むなど、水産業にしていかなければならない」と若い漁師さんたちに言っています。

今、本格的に取り組めばいいと思っているのが、アワビの養殖です。アワビは1年で、ちよつとした値がつきます。アワビを1年育てれば、一口アワビになります。3年育てれば、市場に出せます。アワ

「漁業」を「水産業」に

ただ、これからの沿岸漁業は大変厳しくなると思っています。我々や特に先輩の時代は、メバルなどの瀬戸内のおいしい魚の需要が高かったものです。

また、祝島ではピワやミカンの生産が盛んで、特に「祝島のピワ」は今ではブランド化され、この辺りでは有名です。しかし、そこまでのものになるには、長い年月と農家のご苦労があつたと思います。

また、祝島ではピワやミカンの生産が盛んで、特に「祝島のピワ」は今ではブランド化され、この辺りでは有名です。しかし、そこまでのものになるには、長い年月と農家のご苦労があつたと思います。

また、先日、週刊誌にも掲載されました。

また、瀬戸内海の魚のすり身のてんぷら(さつま揚げ)は、昔から食卓にありました。焼うどんに具材として入れたり、そのままみんなで食べたり。よく食べました。今では人気の特産品になっています。

神舞は4年に一度、祝島で行われる神事で、山口県指定無形民俗文化財



ふるさと納税で人気の「車エビ」



国指定重要文化財の『四階楼(しかいろう)』は幕末の志士小方謙九郎が建てた擬洋風建築



発想が町を変えていく

城山歴史公園には、春先にきれいに咲く河津桜を目当てに、多くの方が訪れます。もともとは地元住民の皆さんの憩いの場を作ろうとして整備しました。その際に植えた河津桜がきれいなので、マスコミがよく取り上げてくれます。

国の支援を受けて、2011年に温浴施設『上関海峡温泉 鳩子の湯』がオープンし、2014年に『道の駅 上関海峡』が開業しました。そこに隣接して2015

年5月にオープンした『総合文化センター』は、地元の方のための施設ですが、町外からも訪れていただき色々なコミュニケーション活動をしていただくこともできます。

去年の夏、上関に寄港したオーストラリア人の夫婦に話を伺う機会がありました。ヨットマンの仲間内では、上関が寄港地に良い、ということがインターネットで広がっているそうです。理由は、『鳩子の湯』で温泉に入れる、おいしい



上盛山の山頂からは、遠く四国佐多岬、九州国東半島が望める



上関町「総合文化センター」は今年オープン



昨年開業した「道の駅 上関海峡」

大きな町とは違って、土日に小売店が閉まります。すると買い物に困る町民も出ます。そこで「道の駅」に行けばお弁当がある、魚がある、するとそこが一つ

大きな町とは違って、土日に小売店が閉まります。すると買い物に困る町民も出ます。そこで「道の駅」に行けばお弁当がある、魚がある、するとそこが一つ

上関町は小さな町なので、子どもの数が少なく野球にしてもサッカーにしても思うようにチームプレーができません。それを悲しんでも仕方ないので、子供が自信を持つようにしようと、義務教育で英会話を徹底的にやろうとしています。学力テストではなくて日常

のコミュニケーションになる。最終的には、イベントで奇抜なことをやって、利用者が慣れてくると、また奇抜なことをやる。人が少ない町の「道の駅」ですから、観光型に変えるだけではなくて、現場の方に、そういう発想で頑張っていた

と思います。また「道の駅」には地産地消の商品が必要です。例えば、まだスイーツがありません。売り場はあるのですから、そこに希望があれば、町が支援してもスイーツを作ろうという気を起こさせたい。そうすると、町外の方に対する定住政策にもなる訳です。

有から有を生むことも容易なことではありません。ましてや、無から有を生むことは、最も難しいことかもしれません。しかし、それを実現するのは人の知恵であり、汗と涙の結晶があつてのもので、皆が力を合わせていけば、この町は変わっていくと思つていきます。

一致団結すれば未来は見える

1970年代に、「鳩子の海」というNHK連続テレビドラマのロケがありました。戦争のショックで記憶を失った少女が広島から上関町に流れ着き、成長していく姿を描いたドラマです。私も撮影のお手伝いをしました。ドラマでは、見ず知らずの子どもを育てるのですが、実際、上関町には優しい人が多いと思います。コンパクトな町ですから、皆、子どもの頃からお互いに知っている訳で、大人になつていがみ合うことにはならないですね。

明るい未来が見えると思えます。皆で一人ひとりが豊かになれば、その集合体が町ですから、そういう町を作ればいいのではないのでしょうか。

海外派遣なども人材育成として積極的に支援しています。フェンシングやヨットの大会では、日本代表で活躍する小学生・中学生が育つてきました。私は、若い人は都会に行きたがるものだと思います。それは都会に行けばいいことがあるだろう、またチャレンジできる機会が沢山あるだろう、と若者は流れるのだと思います。

今日を見て明日を語るのではなく、明日を見て今どうするか、みんな「志」を一つにすれば未来は見えてきます。(談)



村上水軍の上関城跡に整備された城山歴史公園には河津桜が咲き誇る